

Sayerは英語でのニックネーム。
本連載では、生物学を中心とする
自然科学の“研究という場”について考えてゆく。

学会でのお作法

人はみかけが大事

学会に参加して初めて発表するのは、晴れ舞台である。自然にいちようらを着てしまい、男性であればネクタイを締めてでかけることになる。現在の日本の学会は、若い男性も老いた男性もみな背広姿を見かけることが多い。私も最初はそうだった。教室の先輩のなかには、口頭発表のときだけ背広を着てネクタイをつけ、発表が終わると脱いでしまった人もいたが。

アメリカに留学してあちらの学会に数回参加したことがあったが、まったくちがっていた。みんなほとんど自由なかつこうなのである。私が参加したのは、遺伝学と自然人類学という2分野だけなので、一般的な傾向は知らないが、1985年にポストン大学で開催された米国遺伝学会に参加したときには、会場でネクタイを締めた男性を一人だけ見かけた程度だ。あとで知ったが、彼は招待講演者の一人で、医者だった。アメリカでも男性のお医者さんは、みなネクタイを締めているよう

である。一方、自然人類学の学会参加者の服装は、ジーンズあり、Tシャツありで、この分野の自由さをよく表していた。

帰国してから、私は学会のあり方をいろいろ考えた結果、自由な雰囲気になるには服装もラフなものがいいんだと結論して、その後は一貫してノーネクタイで参加している。学会というのは、そもそもその分野の研究者が集まって研究成果を発表し、自由に議論すべき場所である。日本を含むアジアの文化は、どうもこの自由闊達さについて不十分な気がする。

あなたが研究発表の場における自由な雰囲気を大事にするのなら、男性の場合ノーネクタイで学会に臨むことをお勧めする。女性の場合は、フォーマルではない服装ということだろうか。

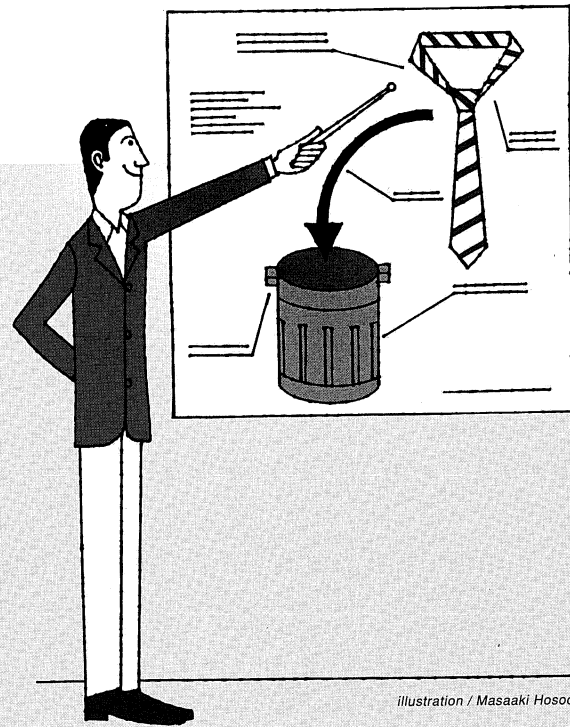


Illustration / Masaaki Hosoda

言葉づかいに気をつけよう

服装のつぎは、言葉づかいである。ここで問題になるのが、敬語だ。日本語は常に話す相手との関係を頭に入れてそれなりの敬語を使わないと、失礼になってしまう。しかし、学会での学問上の議論はみな平等であるべきだ。すると自然に、誰に対しても敬語を使うということになる。実際に、多くの研究者が、一対一ならもう少しぞんざいな言い方をするかもしれない若い研究者に対して、学会発表の質疑応答などの際には敬語を使っている場面を見かける。日本語に敬語がある以上、このような話し方をするべきだろう。敬称もそうである。私が座長を

* 不等交叉によって生じる遺伝子重複は、同じ染色体の近接した場所に遺伝子のコピーが生じるので、直列重複とよばれる。それらは塩基配列がよく似ているので、遺伝子変換を生じて、重複後に生じた変化を消し去り、両者が均質化する可能性がある。この均質化の機構には不等交叉も考えられるが、遺伝子変換とのちがいは、均質化が生じた塩基配列上の位置を調べたり、系統樹を一般化した系統ネットワークを描くことで示すことができる。

齋藤成也 (さいとう・なるや) 1957年福井県生まれ。1979年東京大学理学部生物学科人類学課程卒業、1986年テキサス大学ヒューストン校生物学医学大学院修了 (Ph.D.)。1989年東京大学理学部助教授、1991年国立遺伝学研究所助教授、2002年同教授。総合研究大学院大学遺伝学専攻、東京大学大学院生物科学専攻教授を兼任。日本学術会議会員。専門分野はゲノム進化、人類進化。

するときには、どの発表者にも同一の敬称を使うようにころがけている。たとえば、大学院生の方にも著名な研究者にも、同じように「～先生」と呼んだり、「～さん」と呼んだりである。英語を使う場合には、ゼロとはいわないが、日本語に比べて敬語表現がきわめて少ないので、楽である。自分はいつも「I」、相手はいつも「YOU」なのだから。

残念ながら、なかには若い研究者に対してのみ、ぞんざいな言い方をする研究者がいる。そのような人は、学問発表の場では誰でも平等だということを、しっかり認識していないのだろう。あらためてほしいものだ。

ジョークを飛ばそう!

日本人は、研究成果だけをまじめに発表することが多い。しかし相手は人間である。つまらない発表だとすぐにうとうととされることを覚悟するべきだ。それに対処するには、ジョークである。とくに発表の冒頭でちらっと冗談を言うと、とたんに会場の雰囲気がリラックスする。もっとも、ジョークを連発しすぎるのはよくない。研究内容を伝えるのが本来の発表の目的なのに、それが薄まってしまうからだ。

私自身も、研究発表でジョークを混ぜることを心がけているつもりだが、英語の発表だと自然にジョークが出てくるのに、日本語の発表だとまわりの雰囲気に影響されてしまい、発表が終わってしまったら冗談をまったく言っておらず、しまったと思うときがある。発表準備のときに、ここでこの冗談を言う、という練習までしておくほうがいいかもしれない。

ジョークといってもいろいろある。いわゆるおやじギャグに分類されるかけこぼしは、あまり高度なものではないので、やめたほうがよい。質の高いジョークは論理構造をもったものだ。ある高名なアメリカの遺伝学者が以前日本で講演したときに、研究者間の人間関係をちらりと皮肉ったり、かつて人気が高かった理論が実は馬鹿げたものであることなどを、ところどころでさりげなく挿入していた。もっとも、これは聴衆がある程度の知識レベルをもっていることを前提とするので、場合によっては全然笑ってもらえないこともあるから、注意が必要である。

驚きを与えてくれる発表を見つけよう

学会にゆくのは、自分たちの研究成果を発表するだけではなく、他の発表を聞

くという目的がある。これまでの教科書の常識をくつがえすような大発見を報告する発表を目の前で聞くことができれば、すばらしいことだ。これは生物学ではなく言語学だが、比較言語学において百年に一度の大発見を報告したシンポジウムに参加できて幸せだったという言語学研究者がおられた。そこまでいなくても、なにかしら驚きを与えてくれる発表を探してみしてほしい。私の場合だと、昨年の日本進化学会でも世話人をしたシンポジウムでのある発表で、直列重複遺伝子間での均質化現象について、いままでも遺伝子変換しか考えていなかったのに、不等交叉もあるということを示す系統ネットワーク*を示されて、驚いた記憶がある。

どんなふうになれば、そのような発表にめぐりあえるのだろうか。大規模な学会ならば、探せばいろいろな発表があるだろう。自分の専門としている分野とかなり異なる分野の発表だと、その分野の人にとってはすでに当たり前になっている現象でも、自分は知らなかったということがよくある。ここまでだったら耳学問だが、研究室にもどってから論文を検索すれば、文献にもとづく確固とした新しい知識を得ることができる。